

染 香

ぜんこう

福 泉 寺 寺 報
令和8年6月
第 143 号
毎月 1 日発行

ホームページ



おて LINE



Facebook



推し活

ふと気がつく、我が家の食卓に並ぶメニューが、以前より明らかに韓国寄りになっています。プルコギにキンパ、スンドゥブにサリ麺……。これまであまり縁のなかったはずの異国の味が、日常の風景としてすっかり浸透していることに驚かされます。

原因ははっきりしています。妻（坊守）の「推し活」です。韓国のアーティストに魅了され、その文化や言葉を吸収しようとする彼女のエネルギーは、実に凄まじいものがあります。よそ見していたら飛行機に乗っていそうです。それどころか、その熱は子どもたちにも飛び火し、家の中にはぎやかです。「推し」の存在が、家族の沈んでいた気分を浮上させ、日々の活力を生み出している様子を見ていると、現代において「推し」という存在が、実にいかに切実な「救い」となっているかを痛感せざるを得ません。

ここで仏教の言葉を借りるなら、この「推し」という存在は、私たちが人生の抛り所とする「帰依」に近いものかもしれません。それは、自分の力ではどうにもならない現実の中で、真実の教えをまるごと信じ、依り代（よりしろ）として生きていく姿勢のことです。

プレゼントする気持ち

このように考えてみると、ほかにたとえば「供養」というものも、「プレゼント」と言い換えられるかもしれません。

そこで、あえてもう少し掘り下げてみます。

『相手にプレゼントしたい』

『相手に喜んでもらいたい』

このような気持ちは、いうまでもなく、この私の気持ちを指しますが、それは、私をこんな気持ちにさせてくれる存在があつてこそです。

だから、私たちは、言うなれば「常にだれかに『させていただく』機会を与えられた存在」なのです。

多くの先人が神仏を大切にしてくられたのは、「これだけ供養（プレゼント）しますので、健康、安全、豊作などをください」と見返りを求める『取引』ではなく、「どのような状況でも、あなた様まかせでありました」と、自分の思いを超えた大きな世界を喜ぶ、純粋な『応え』であつたはずです。

プレゼントする気持ちさえも、実は相手からいただいたもの。私の「推し」への熱狂も、亡き人を偲ぶ涙も、実は「私を動かすプレゼント」なのかもしれません。

（住職）

真宗用語の基礎知識



【供養】

一般には「死者の冥福を祈る儀式」と思われがちですが、本来は「供給資養（くきゅうしよう）」の略で、仏・法・僧の三宝を敬い、真心を込めて何かを捧げることを意味します。

これは「私からの一方的な贈り物」ではありません。「恩を報じる（報恩）」と同様に、相手からいただいた計り知れないご恩に対し、溢れ出した感謝をもって「させていただく」という姿勢です。見返りを求める「取引」ではなく、相手を想う心そのものが、実は自分自身の心を豊かに耕してくれる「逆プレゼント」のようなものなのです。

なので、包みやお菓子の向きも、「私の思いを第一に考える場合」なら、あちら向きになり、「あなたの思いを考える場合」なら、こちら向きになります。（〇×ではなく、受け止め方です）

ち ょ っ と あ た ま の
こ り ほ ぐ し

1 枚の紙を切らずに 1 0 枚にする方法があります。どんな方法？

こたえは裏面です

おてらより

★第56回鴨川組念仏奉仕団の報告とお礼

●去る6月4日、5日に、京都は西本願寺に32名、無事参拝いたしました。2日目の大原の里三千院・勝林院も含め、大変有意義なひとときを過ごすことができ、感謝の念に堪えません。



★お盆法要

- 8月16日（日）午前10時～12時ころ
- 対談「医療と仏教」
- のじまホームクリニック院長 野島洋樹先生
- 中国中央病院緩和ケア認定看護師 田原由季先生
- と、住職
- 初めての試みです。医療と仏教は、大変調和しやすい世界です。ぜひ楽しみにしてください。

臨終と念仏

生駄 密蔵

四月十八日、母がなくなりました。

長い生涯でしたが、平凡な一生で、男女十一人の子を産み育てた、と言うのが自慢できる位のことと、まず平凡で安穩（あんのん）な生涯だったと言えましょう。

九十四才の老婆の死は、世間では日常茶飯の事で、当然のなりゆきでしょうが、一人の死はいつでも、その周囲、殊に血を別けた肉親にとっては深い感慨のあるもので、本人も

「こんなに長命するとは思わなんだ。みんなに迷惑かけるのお」と言い「死ぬことは隣座敷え行く程のこと」と満足して往ったのだから、私ももう嘆くことはない、と思いつつも、身体の芯底からジーンとわいて出る悲しさは抑えようがありませんでした。

脈がとぎれる様になり、肌の色が違ってゆくのが、やるせなく、大勢の息子や娘達が、この手でおしめをかえてもらい、この手でぶたれ、この手で撫ぜられて育ったのだ、この手のおかげで今の私が居る。と思うと、ああ、別離だとググツとこみ上げるものがあり、胸を一杯に圧しつける様でした。

雨が降り出しました。

雨滴がボツボツ庭の苔の色を染めて、そして地面に吸いこまれてゆきます。雨の滴は高い空

の黒雲の中で凍って生れるそうです。そして、生れるとすぐ落ちはじめます。一目散に地面めがけて落ちます。それがさだめなのです。地面にあたって形を失い、雨滴の一生は終わります。

ひとしづくの雨の滴が、今落ちました。あるべき場所に、安らかな境地に落ち着きました。やがて誰彼の滴も地面に到着するでしょう。

母の床を取り囲む人々が、くちぐちにお念仏申します。医者である娘婿が脈をとっていた手を離し「最期です」と言いました。泣声も混って、お念仏の声はいちだんと高くなりました。

私は、ふと父の臨終の場面を思い出しました。あの時はまわりの人も数多く、甲高い子供の声も混って、部屋中唸る程の声でした。

すると、臨終の父が顔をしかめ、わずかながら手を動かして「念仏をやめろ」という風を示しました。伯母が「静かに最期を迎えたいのだろう、静かにした方がよい」と念仏を止めました。

あの時、父は念仏を嫌ったのか、それとも他の肉体的苦痛で顔をしかめたのか、何を考えたか、それは判りません。

私は、母の死の床で、みんなが念仏申す中で「ああ、そうだったかも知れん」と思いました。

念仏は、仏様が我々に回向して下さったもので、私達が他に回向するものではありません。

今、息を引きとろうとする人をとりまき、くちぐちに唱える念仏には、多分に「良い所へ行

きなさいよ」「この念仏の力で後生の良いように」と回向する気持が混ってはいないでしょうか。父はそんな念仏を嫌がったのかも知れませんが、

「平素は仏法を聞こうともせず、念仏のいわれを耳にしたこともないくせに、口さきだけの念仏は称えてくれるな」

と叱ったのかも知れません。

念仏は仏様がくださって、私達はそれを咀嚼して吞み込んでいます。かみくだいたものですが、時々、口までもどして、その美味しさを味っています。丁度、牛が一度腹へ入れた食物を反芻（はんすう）して味わう様に。

これは本当に美味しいものですよ、食べてみませんか、とひとに奨めることは出来ても、腹へ入れたものですから、はき出して人にあげるわけにはゆきません。

念仏は自分のもので、ひとにあげるものではありません。

たしかに、臨終の枕辺でまわりの人が唱える念仏には、死にゆく人の為に、死にゆく人に上げる気持がこめられているようです。

父は、それをとがめたのかも知れないという気がしましたが、考えてみると、父はああいう場で、そんな叱責めいたことをする人ではありませんでした。おそらく、肉体に苦痛があったのか、もう称名にも用のない境地に入っていたのか、と思い返しました。

人の臨終に立ち会って唱える念仏は、たとひ回向どころが混っているとしても、単純にそれだけではありますまい。今更深く無常觀に打たれた人もありましょうし、（愛別）離苦のつらさに、やりばのない人もありましょう。やるせなさ、無力感、複雑で厳肅なものがモヤモヤして、ほかに出口のないまま、理屈なしの念仏となって唱える人もありましょう。やりようのない絶望感から、人間を超えた大きなものにお委せします、という気持の人もありましょう。「その念仏には回向どころが混っているからいけません」と、とがめだてるには、あまりに複雑すぎる、と思われれます。

むしろ、ご法（宗教どころ）は、こうした素朴な、本能的な情緒にそってこそ、純粋に力強く働くもののようなので、潔癖すぎる批判はすべきではないでしょう。

しかし、だからと言って、回向ごろの念仏をそのまま見過ごすことはなりません。人の臨終に会って申す念仏の中には、我も人も「死にゆく人にたむける」気持が働くことを、自ら秘かにザンゲしなくてはならないのではないのでしょうか。（傍線編者）

